世界はいつだって理不尽なものだろう？

過負荷で異常なナニカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界はいつだって理不尽なものだろう？

【Ｎコード】
Ｎ６６９５Ｖ

【作者名】
過負荷で異常なナニカ

【あらすじ】
世界ってのはいろいろなものを見せてくれる。
幸せ、嬉しさ、恋、友情、楽しさ、怒り、悲しみ、憎しみ、恐怖。
そうだ、世界が見せるものは決して幸せなものとは限らない。それ故に世界とは、現実とは残酷なものだ。

プロローグ（前書き）

題名と内容はあまり関係ないです

プロローグ

「ああ、暇だな。なあ、日之影。」

「そんなことを思うんだったらまた留年しないようにちゃんと勉強したらどうなんすか？」

二人しかいない１３組で声が響く。

「俺が勉強？冗談きついな。どうせ就職するところも進学するところも決めないんだ。このまま居てもいいだろう？」

「先代生徒会長としてそれはどうなんですか？」

ため息をつきながら日之影は言う。

「そんなの関係ないな、俺は俺らしく生きていく。それに？後輩共がどんなふうに暴れていくのか気になるからな。はっはっは。」

その男は高笑いする。

「はぁ、まあそこがあんたらしいがな。」

「そうか？」

「そうだよ。」

「相変わらず影薄いな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

一時の沈黙

「・・・それは俺の異常だからしょうがないでしょう。」

「そうだったな。」

「俺はこんな先輩に負けたのか・・・・・」

「おいおい、言っとくがこれでも伊達に生徒会長やってたわけじゃないからな。」

「今のあんた見てるととても『学園最強』とは思えんぞ。」

「・・・ふむ。」

男は考え込む。

「かんろくがないからだろ。」

あっさりとした答えだった。

主人公紹介

名前　闇天光夜（あんてん こうや）

日之影の前の第９６代目生徒会長で学園生活がやめられないとのことでわざと留年。（そこそこ頭はいい）
小さい頃から理解力が異常に高かったため、人間の欲深さや傲慢さ。人間の闇を知り絶望したことがありその時に過負荷が覚醒し、親に施設に売られる。
愛想はいい方で人懐っこい。苦手なものはいるが委員長陣とは冥利を含め仲がいい。友人を傷つけるものに対しては意外と容赦がない。
身長は日之影より少し小さく緑色のショートヘアで青眼。無と刻まれた黒いダイヤのピアスをしている。（なぜ黒いかは不明）
現在不敗記録更新中で普段は学園中を歩き回っている。

異常　究極《オメガ》　限界を超えた果てに辿り着く有一無二の力で不可能を可能にする世界の理を無視した異常

過負荷　破壊スルモノ《オールブレイク》　対象が物体でも目に見えないものでも壊せる。例（心、異常、過負荷・・・異常や過負荷は一時的に破壊できるがある程度時間が経つと元に戻る。

　虚ロナルモノ　存在が曖昧なものになり全ての干渉を消し去ることができる。安心院の口写しや球磨川の大嘘つきも無効化可

能。

生徒会長に普通の人間は居ない

俺はふわふわとした空間で寝転び呟く。

「ああ、そういえば今日は新しい生徒会長がスピーチみたいなのするっけ・・・」

「ふーん、そうなんだ。まあ、私は関係ないけどね～。」

その隣で布団にくるまって働かないと書かれたアイマスクを付けた少女がいう。

「きみ、登校義務を免除させたとはいえ委員長だろうに・・・・」

「そういう光夜くんだって未だに学園に居座ってるでしょ～」

「悪かったね。というかお前夢の中でも寝るのか。」

そう、この少女　大刀洗斬子は一日２２時間寝ている。だから話そうと思ったら夢の中にでも入り込まないといけないんだ。え、そんなの不可能だって？俺・・・僕？まあ、どっちでもいいや。僕に不可能はないんだよ。

「寝ていない私なんて私じゃないと思うよ～？」

「まあ、そう言われてみれば。っとそろそろ始まるね。じゃあ行くｎ「ねえねえ。」ん？」

斬子が布団から頭を突き出してこっちに向ける。

「撫でて撫でて～♪」

「はいはい」

ぽふっ、なでなで

「ふあぁぁぁぁ／／／／」

そんなに気持ちがいいのだろうか・・・・

僕は再び斬子が眠ったことを確認すると夢から出た。

屋上で目が覚める。

「ん～、じゃあ新生徒会長の顔を拝みに行きますか。」

『世界は平凡か？』

そうかもな

『未来は退屈か？』

それはわからん

『現実は適当か？』

少なくとも僕はそうだな

「安心しろそれでも生きることは劇的だ！」

そうですか。

『そんなわけで本日よりこの私が、貴様達の生徒会長だ！
学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい。
２４時間３６５日、私は誰からの相談でも受け付ける！！』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・今代のは威勢がいいな。

つか日之影、あんなのに任せて大丈夫なのか

――――――――大丈夫だ、問題ない。

・・・・何か聞こえた気がするけど気にしないでおこう。

食堂に来てみたがあの生徒会長の噂で持ちきりだな。

「俺は絶対！生徒会には入らない！」

おお、大声で発言している君。後ろでその生徒会長がマネしてるぞ。

「まあ、そうつれないことを言うものではないぞ善吉よ。」

「うお！？いつからいたんだ！？」

さっきからいたよ。あ、連れてかれた。

「一体何だったんだろ・・・・・」

「あれ？これはこれは先々代会長様ではありませんか。あひゃひゃひゃひゃ。」

「不知火か、あとなんでいつも笑ってるんだ？」

「そんなことどうでもいいじゃないですか。それよりなんでここに？」

なんでって、

「それはご飯食べるためでしょ。」

「あひゃひゃ、そうですよね～。」

なんで聞いたんだよ。

もしゃもしゃ

俺はパンをほおばって思った。

マジで生徒会大丈夫なんだろうか・・・

負完全と不完全な完全（前書き）

主人公がある人といちゃつく？だけです。

負完全と不完全な完全

「そういえばあいつ今何してんだろ・・・」

不意に思い出す。あの負の完全といえる中身をした彼女(かのじょ)を。

確か俺が中3の時・・・・

『人は意味も無く生まれて意味も無く死んで行くんですよ、先輩。』

いきなりあんなこと言われたっけ・・・

『先輩、僕と付き合ってください。////』

そういえば告白されたっけ、断ったけど。

『どうして?ねえ、どうして?僕はこんなに先輩のことを想ってるのに・・・(ギリギリ・・・)』

なんかヤンデレになっちまったけど・・・ちなみに回想のギリギリってのは首を絞められた音だ。

「ここ最近たいして面白いことないしな～」

生徒会の連中がいろいろやらかしてるけど何分面白さというかインパクトがない。あんな犬っころを怯えさせてしまう時点でちょい失望だな。強者のオーラ剥き出しで動物が近寄るわけないのに。

「会いに逝くか。」

何か字が違うけどまあいいや・・・

ここはとある血なまぐさい学校・・・・

絶対ここにいるな。だって聞こえるもん、なかからものすごい悲鳴が聞こえるもん。

「やべぇ、絶対あいつやらかしてやがんな・・・これは腹括らないといかねえか？」

おれは地獄絵図とかした校舎の中を進んでいく。すると一人ネジをここの生徒だろう男子の肩に突き刺しているすこし髪の長い黒髪の女の子がいた。

「おい、球磨川(くまがわ)」

俺が声をかけると彼女は突然こちらへ顔を向け、凍りついたような無表情な顔が歓喜のモノへと変わる。

「・・・・・・先輩?・・先輩・・・先輩・・・先輩!先輩先輩先輩先輩先輩先輩先輩先輩…」

彼女、球磨川はひたすら俺の名前を連呼して俺の胸に飛び込んできて頭を押し付けてくる。正直少し苦しい。

「わかった、分かったから落ち着け。」

「あ、はい。ヒッヒッフー、ヒッヒッフー・・・」

なんで腹式呼吸・・・

「で、どうしたんですか?やっぱり考え直してくれたんですか?」

「いや、暇だから会いに来ただけだ。」

「・・・・・・(ボソッ)なんだ、じゃあ・・・」

グサ!

「死んでください♪」

彼女のつぶやきと共にいつのまにかその手に握られていたネジが俺の心臓に突き立てられる。が、

「あいにく心臓刺されたくらいじゃあ死ねないぞ？」

俺はケロッとしている。種を明かせば虚ロナルモノで干渉を無効化してるだけだが。

「残念、いまなら僕も付いて逝くのにな～。」

「いや、付いてきちゃダメだから。」

この娘は大嘘つきで自分の生を嘘にしてほんとに付いてきそうだ。そういう目をしてる。

「ふふふ、なんだかんだ言っても結局先輩は優しいんだね。」

球磨川は口に手を当て、淑やかに微笑を浮かべる。

（こういうところは普通の女の子で可愛いんだけどなぁ・・・」

「／／／／／／」

あ、声に出てたか・・・・

「せ、先輩。もう無理！」

「へ？ってうおわ！？」

再び俺に突進を食らわす球磨川、今度はさっきのに比べて勢いが強く床に組み伏せられ四つん這いになる。一応言っておくが、下　俺　上　球磨川だ。

「ちょっ・・・・んむ！？」

何をされるか悟った俺は止めようとするが、ああ悲しいかな。それは球磨川の唇によって遮られた。

「あむ・・ん・・・っはぁ・・・」

「んんんん～～！！！」

しかも舌を入れられた。いやらしい水音が血みどろの廊下に小さく響く。それから5分後に球磨川は名残惜しそうに唇を離す。

「・・・・これで二度目、俺はなんて無力なんだ。ｏｒｚ」

実は告白されたとき、断ってヤンデレ化したときも同じような感じでやられたことがある。

なんで力で勝っているはずなのにどかせられないんだ・・・・

――――それはそれがお前の運命だからさ　ｂｙ作者――――

なんか納得いかない声が聞こえてきた。

「ほんとはこのまま続きをしたいんだけど・・・」

「それだけはさすがにやらせん。」

そう言うと球磨川を押しのけ立ち上がる。

「そろそろ帰る、とりあえず元気そうだし。」

というか元気すぎだ。こいつのまえで油断したのが今回の失敗の原因か・・・

「僕も久しぶりに先輩に会えて嬉しかったよ？」

「そうかい。じゃな。」

俺は廊下から窓ガラスを突き破って忍者のごとく住宅街の屋根を駆け抜ける。

「ふふふ・・・・先輩は、誰にも渡さない・・・・・・・・誰にも。」

負完全と不完全な完全（後書き）

ども、ものすごく約三ヶ月ぶりの更新です。
あと球磨川ですが女体化してます。簡単に容姿などの説明すると、髪が元の髪型を少し伸ばした感じです。体型はまあ、ナイスバディですね。下心丸出しとか思われてもしょうがないですけど。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6695v/

世界はいつだって理不尽なものだろう？

2011年11月9日01時01分発行